

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(5年計画の2年度目)

1. 研究課題

(和文) 日本・アジアにおける差異の表象

(英文) Representations of Differences in Japan and Asia

2. 研究代表者

(氏名) 竹沢泰子

3. 研究期間

平成23年4月から平成24年3月まで

4. 研究目的(400字程度)

研究会の目的、人種の表象と社会的リアリティについて、とくに日本・アジアに焦点を当てて考察することである。人文科学のみならず自然科学をも射程に含め、分野横断的な研究体制をとる。人種は、概念としては生物学的実体がないことが近年の遺伝学研究などで明らかにされているが、医療、社会制度、美意識にいたるまで、強固に社会的リアリティをもっている。何がどのようにこのようなリアリティを生み出し維持させているのだろうか。その鍵を表象に求め、そのしくみに光を投じることが本研究の狙いである。

欧米の人種表象の研究では、視覚的な表象に関しては膨大な研究の蓄積が存在するが、日本やアジアにみられる「見えない人種」についての、非視覚的な表象にかんしては研究例が多いとは言えない。「汚い」「臭い」「怖い」といった生活感覚で語られる差異。非可視的でありながら、強固に語られ続ける「穢れ」「血が違う」などの言説。日本や東アジアなどの地域に顕著に見られる、こうした「見えない人種」の社会的リアリティを創り出す表象のしくみを炙り出すことに重点をおきたい。

5. 本年度の研究実施状況(400字程度)

平成23年4月から平成24年3月までの間に、計13回の研究会を実施した。まず、通常的人文科学研究所における研究班メンバーによる研究報告として、6月には天皇制と部落問題における人種表象についてタカシ・フジタニと関口寛が報告を行い、成田龍一、北原恵、金仲燮がコメントを行った。12月には金仲燮、松本ますみ、石井美保、大浜郁子が、それぞれ韓国、中国、インド、台湾における人種の表象について報告を行った。そして3月には、斉藤綾子のコーディネートのもとで日本映画における人種表象の在り方について議論を深めた。

また本年度は、こうした通常の研究会に加えて、海外において国際的に研究成果を発信していくことを重視した。7月には、オーストラリア開催された国際人類学民族学会議において

“Changing Representation of Indigenous and Migrant Groups in Globalizing Japan:

Genes, Bones, and Cultures”と題したパネルを組織し、竹沢泰子、瀬口典子、スチュアート ヘンリ（本多俊和）、工藤正子、前嵩西一馬が報告を行った。また10月には、カリフォルニア大学ロサンゼルス校にて、同校のLane Ryo Hirabayashi 教授と代表者がオーガナイザーとなり、“Japanese and Asian Americans: Racializations and Their Resistance”と題したシンポジウムを主催し、竹沢泰子、南川文里、河上幸子、Gary Okihiro ら日米研究者合計6名が報告を行い、3人のアメリカ人研究者がコメントを行った。さらに平成24年1月には、「人文学とゲノム研究のインターフェイス」と題して、京都大学東京オフィスにTimothy Caulfield教授やゲノム研究で国際的に著名な鎌谷直之教授、徳永勝士教授ら招き、ゲノム研究における文理融合の試みを発展させた。こうした海外への発信に加えて、7月と11月に2回の合宿を開催し、研究班メンバーによる論集の出版に向けて議論を深めた。

6. 研究成果の概要（400字程度）

まず、本年度は、2度の合宿（計4日間）における研究班メンバーの活発な議論を通じて、「血」を共通テーマに据えて、共同研究の成果を整理する視座を発展させた。これは、「血」への言及による「見えない人種表象」、「血」と「知」の融合による「人種の科学表象」、そして「血」と「地」の乖離状況がもたらす「ミックス（混血）表象」の相互作用に着目するものである。次に、「人文学とゲノム研究のインターフェイス」の成果を踏まえて、ゲノム研究における人種表象の倫理的問題に関するJournal of Human Genetics に共同声明（statement）への投稿を準備した。この内容は学会だけでなく、マスコミを通じて社会に広く発信していく予定である。さらに、カリフォルニア大学ロサンゼルス校におけるシンポジウムの成果をもとに、日系／アジア系アメリカ人の人種化と抵抗をテーマとする共編著の出版作業を進めた。

7. 共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など） 出版

- ・ 『「今、アイヌであること——共に生きるための政策をめざして」シンポジウム報告書』 「人種表象の日本型グローバル研究」平成23年度研究成果報告書 別冊3、2011年8月。
- ・ *Japanese and Asian Americans: Racialization and Their Resistances: Proceedings of a Japan-based Global Study of Racial Representations 2011-2012*, Takezawa ed., Kyoto: Kyoto University, 「人種表象の日本型グローバル研究」平成23年度研究成果報告書 別冊4、2012年3月。
- ・ *The Interface of Humanities and Genomics II: Proceedings of a Japan-based Global Study of Racial Representations 2011-2012*, Takezawa ed., Kyoto: Kyoto University, 「人種表象の日本型グローバル研究」平成23年度研究成果報告書 別冊5、2012年3月。

公開シンポジウム

- ・ Japanese and Asian Americans: Racializations and Their Resistance, University of California, Los Angeles, October 13, 2011.

学会分科会

- ・ 国際人類学民族学会議（2011年7月、於：西オーストラリア大学）

“Changing Representation of Indigenous and Migrant Groups in Globalizing Japan:
Genes, Bones, and Cultures”

8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区分	所属機関数	参加人数	延べ人数
学内	2	8	56
国立大学	5	12	82
公立大学	1	1	5
私立大学	12	13	105
大学共同利用機関法人			
民間・独立行政法人等	4	7	18
外国の研究機関	9	12	26
(うち大学院生)	(1)	(1)	(3)
計			

※当該年度の共同利用・共同研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

(例)

- ・ 1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた(参加した場合) : 参加人数2人、延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

論文数	
上記のうち国際学術誌に掲載された論文数	

※研究者がファーストオーサーであること。学内の紀要等に発表されたものを除く

なお、高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された論文がある場合、その雑誌、掲載論文、そのうち主な論文の詳細等

掲載雑誌名等	論文名	発表者氏名